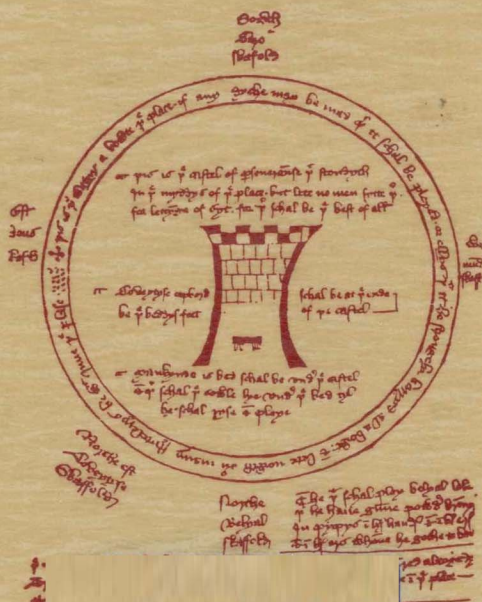


イギリス道徳劇集

鳥居忠信
山田耕士
磯野守彦



訳者略歴

鳥居忠信（とりい・ただのぶ）

1945年生まれ。1972年名古屋大学大学院文学研究科
博士課程英文学専攻中退。三重大学教授を経て、現
在名城大学教授。

山田耕士（やまだ・こうし）

1940年生まれ。1968年名古屋大学大学院文学研究科
博士課程英文学専攻単位取得満期退学。現在名古屋
大学教授。

磯野守彦（いその・もりひこ）

1944年生まれ。1972年名古屋大学大学院文学研究科
博士課程英文学専攻単位取得満期退学。現在愛知県
立大学教授。

イギリス道徳劇集

1991年2月25日 初版発行©

定価7,107円
(本体6,900円)

	鳥 居 忠 信
訳 者	山 田 耕 士
	磯 野 守 彦
発 行 者	串 原 国 穂
組 版 所	日 本 ハ イ コ ム
印 刷 所	互 恵 印 刷
製 本 所	関 山 製 本 社

発行所 リーベル出版 (Liber Press)

〒101 東京都千代田区神田神保町3-17-3
電話(03)3234-1368 FAX(03)3234-0709

ISBN 4 - 947602 - 33 - 3 C 3098

鳥居忠信
山田耕士
磯野守彦
共訳

イギリス道徳劇集

リーベル出版

安田章一郎先生に捧げる

目次

初期道德劇の世界	七
堅忍の城	三三
人間	二七五
現世と幼児	三五一
青年	四二
嘲り屋ヒック	四七五
万人	五四一
参考図版	六〇九
主要文献	六四一
初出一覧	六五六
あとがき	六五七

初期道徳劇の世界

序 立見する子

周知のように、一五七六年、イギリス最初の常設公開劇場シアター座が旧ロンドン市の北郊に建てられたが、その数年前のこと、ある貴族をパトロンとする一座がイングランド南西部のグロスターに現われ、市長の公演許可を求めた。市長が快く認めると、慣例に従い、公演に先立ち無料の「市長の劇」が上演された。その劇を、ベンチに座る父の脚の間に立つて観劇する一人の子供がいた。名前はR・ウィリスといい、シェイクスピアと同年の生まれだったという。出し物は『安心のゆりかご』(The Cradle of Security)だった。その台本は残念ながら散逸したが、ウィリスの伝えるところによれば、それはこんな内容のものであったという。王が三人の婦人の誘惑に陥り、説教や訓戒に耳を傾けなくなる。やがて彼は舞台のゆりかごの中で彼女たちの子守り歌を聞きながら眠る。彼女たちは、ブタの鼻に似た仮面を三本の針金を使って彼の顔に縛り付ける。青い服と赤い服の老人二人が登場し、青い服の老人は矛でゆりかごを叩く。

仮面の取れた君主は、嘆き悲しんだ末に悪霊たちに運び去られる。

「安心のゆりかご」は、安心どころか、油断のならない、身心の破滅の場としての現世を表わすミクロコスモスの象徴だったわけである。ウィリスは、この「道德劇」の主人公は現世の邪悪な人たち、三人の婦人は高慢と貪欲と邪淫、老人たちは世界の終末と最後の審判を表わすとしている。そしてウィリスは、その強烈な観劇経験を踏まえ、児童の教育に及ぼす演劇の影響を重視し、『安心のゆりかご』を含めて往時の劇や「無害の道德劇」^{モラルズ}と、それらに続く「悪徳の教師にして腐敗を挑発する劇」との落差を慨嘆している（『小太鼓打ち 別名 罪を悔いる者の個人修業』一六三九年）。

その慨嘆の是非はともかくとして、これは数少ない道德劇観劇記の一例である。それによっても道德劇の世界は管見できるが、以下において、『安心のゆりかご』の祖先たちに当たる初期道德劇についてその概略を見ることがしたい。

一 道德劇とイギリス中世劇

道德劇に当たる英語としては、moral, moral play, morality, morality play, そして moral interlude が挙げられる。しかし、これらの名称に先立ち、最初の道德劇『生の傲り』（*The Pride of Life*）では「ゲイム」（七と一一〇行）が使われている。また、この言葉は『堅忍の城』（三

六四五行複数形) やスケルトンの『寛仁』(John Skelton, *Magnificence* 二五六七行) にも見られる。一方、メドウォールの『自然』(Henry Medwall, *Nature*) 以降「インタールード」という名称が扉によく使われている。

OED (一九八九年版) によれば、*moral* が道徳的な教化と抽象的属性の擬人化を特徴とする道德劇の意味で使用された初例は一五七八年の『心と節度の結婚の道德劇』(*A Moral of the Marriage of Mind and Measure*) である。これは新暦で一五七九年(一月五日)のことになる。^二
moral play の初例は本書収録の『万人』である。そして *morality* については、*OED* は一七七三年に初例を見ているが、E・K・チェインバースも指摘しているように、これは、一五〇三年八月一三日にジェイムズ四世とマーガレット・テューダーの結婚を祝して彼らの前でヘンリー七世王一座(座長ジョン・イングリッシュ) が演じた『*a Morality*』をもつて初例とする。^三ただそれはフランス語の『*moralité*』を借用したものらしく、長い間英語としては定着しなかった。文学用語となったのは、R・ポッターによれば、一七四一年である。^四それゆえ、*morality play* に至ってはもつと最近の造語である。

十八世紀のトマス・ウォートンによれば、*moral interlude* は、一五〇四年のスケルトンの『降霊術師』(*The Nigramansir, a moral Enterlude*) が初例となろうが、この劇は伝わっておらず、^五どうもウォートンの作り話ではないかとされる。それはともかくとして、*play* が在来の言葉であるのに対し、*interlude* はラテン語に由来する。十四世紀初め頃、『大学生ト娘ノインテルルー

『ディウム』(Interludium de Clerico et Puella 断片現存)という世俗劇が題名とは違い英語で書かれた。劇を意味する英語のインタールードも同じ頃の一三〇三年に初例を見る。インタールードの語源は「……の間に」と「ゲーム、プレイ」の意である。その具体的な意味は、劇に限っても幕間劇まくあいげきから、ホールでの宴会のコースの合間の劇や、役者間の対話劇と、人によって解釈が分かれる。さらに、J・P・コリアは、一八三一年、ジョン・ヘイウッド(一五一〇年代から三〇年代に活躍)の劇を聖史劇や道德劇と区別してインタールードと呼び、以来、インタールードはイギリス演劇史上、道德劇に続くタイプのものと一般に考えられるようになった。^六それはそれで正しいのであるが、P・ハッペも指摘しているように、インタールードは大規模な聖史集団劇と本格的な道德劇と祝祭仮面劇以外の十四—六世紀のすべての劇に適用された融通に富む言葉である。それは十六世紀前半に発展を見、その後最盛期に入った末、一五八〇年代、新劇運動が高まる中で急速に衰退した。インタールードの一般的特徴は道德を目的とし、行数が千行程度の比較的短い、単純な内容で、喜劇の要素を含むことである。それゆえ、本書収録の劇のうち、『堅忍の城』と喜劇性の少ない『万人』以外はすべてインタールードと呼ぶこともできる。しかもそれらは、特に道德劇的特徴を有するから道德劇的インタールードと呼ばれるのである。(なお、『寛仁』も『自然』と同様に A goodly interlude と扉にある。)

イギリス演劇は、周知のように、十世紀後半、教会でのラテン語典礼歌唱劇に始まり、十一—十三世紀にはラテン語・フランス語・アングロノルマン語の聖人劇セイントプレイ(奇跡劇や改宗劇とも

呼ばれる)や典リタージュカルプレイ礼劇ミステリープレイ、聖史劇が演じられた。その頃のものは少数を除きすべて散逸し、その実体はつかみにくい。それは在来の民俗劇にも当てはまり、初期の民俗劇については十八世紀のテキストに多くを依拠せざるをえない。^八しかし、十四世紀になると、現存の資料(後世の写本が相当数あるけれども)も多くなり、それらによって英語劇が目ざましい発展を遂げたことが判明している。主人公の二十二の台詞のみ現存するとは言え『モロード公』(Dux Moraud)という父娘の近親相姦と殺人と後悔を扱ったイーストアングリアの奇跡劇や、どこの大学町でも見られるような恋を扱う前述の『大学生ト娘ノインテルルーディウム』が書かれる。コーンウォール、ヨーク、チェスター、コベントリー、ウェイクフィールド(タウンリー)各聖史集団劇が作られる(ルードラス・コベントリーは十五世紀前半とされる)^九。そしてこの十四世紀半ば頃から英語の道德劇の具体例を見るに至る。

道德劇については、それが聖史劇から「派生した」という従来の見方は誤りと論じる説(G・ウィツカム)もある。^{一〇}資料が乏しいため、その断定には躊躇を覚えるが、少なくとも両タイプの劇が聖人劇とともに十四―五世紀にあつて同時発生^{一〇}の形で、また相互に影響し合いながら展開していったという考え(D・ベビングトン)は認められよう。^{一一}天地創造から最後の審判までを扱う聖史劇に見られる人類の堕落とキリストの贖罪による救いの主題は、道德劇の主人公たちの経験する精神的な過程と重なることが多い。

一体、ヨークでの聖体コーパスクリスティブレイ祭劇公演の最初の記録は一三七六年だが、七八年頃にそのヨークで

『主の祈り劇』^{バスターナクタープレイ}が上演された、とジョン・ウィクリフが伝えている。彼によると、それは美德と悪徳による靈魂争奪戦と擬人法と説教・教訓という目的を持つものとなり、これらは道德劇の特徴をなすものである。^{二二}残念なことにその劇は、リンカーン（一三九七年）やベバリー（一四六九年）での『主の祈り劇』その他と同様に散逸してしまい、それ以上のことは分からない。それから、ルーダス・コペントリーなどにも観想や死や知恵といった寓意的な人物が登場するが、彼らは道德劇の人物の先祖というよりは、むしろ家族と考えられる。

そのようなわけで、不明なところが多いけれども、聖史劇から道德劇へという単純な進化論説だけは今日、否定されているとしてよからう。その一方で、道德劇が教会暦や典礼に縛られることなく上演可能なものとして始まったことは、聖史劇と違う重要な特徴として挙げられる。道德劇は中世寓意文学が流行する中で、托鉢修道士その他の聖職者が日頃の単なる寓意的説教にあきたらず、^{二三}実例としての劇でもって人心の教化に努めた、いわば日常の布教活動の一環だったらしいからである。

二 宗教改革以前の道德劇

P・J・フルは、イギリスの道德劇の書誌学的概観を試みる中で、十六世紀末までに書かれた道德劇とそれと関連する劇五十九編をアルファベット順に挙げている。^{二四}『安心のゆりかご』

など散逸した外の多くのものも考えると、当時の道徳劇の人気のほどがよく分かる。フルが依拠したB・スピバックは、その道徳劇を初期（十五世紀）、中期（十六世紀前半）、末期（十六世紀後半）に三分し、聖から俗へ、寓意から具象へ、寓話（靈魂戦争）から歴史（陰謀もの）へ、類型から個々の人物へ、そして特に悪徳のバイスの誕生から成長・活躍へと、道徳劇の世界がいかに展開していったかを跡付け、シェイクスピアを道徳劇の伝統の中に見事に位置付けた。^{一五}

本書に収録した道徳劇は、スピバックの分類からすれば、初期から中期の前半のものとなるが、ここでは一括して初期道徳劇として扱うことにする。『万人』はオランダ語劇（一四九五年頃の作）の翻訳と思われるが、そのイギリスでの出版はこの期間に入る。歴史的にはヘンリー四世（在位一三九九―一四一三年）の頃からヘンリー八世による宗教改革（一五三四年）の前までおよそ一二〇年間に及ぶ。その間、西ヨーロッパのキリスト教世界は、大分裂と変化と不安の時代から宗教改革の時代へと進む。イギリスは、大陸諸国と同じく十四世紀半ば以来のペストの流行に時々苦しみながら、フランスとの百年戦争の継続とその終戦後まもなく始まるバウ戦争を経て、テューダー王朝による絶対主義国家としての基盤を固めていった時代である。

その初例から一五二〇年頃までの道徳劇のうち現存するものを、創作年代から役者数まであくまで推定の範囲内だが、諸説の中からベビングトンその他を参考にしてまとめてみるとおよそ次のようになる。^{一六}

収本書	創作年代	作者	題名	初演場所	行数	配役数	役者数
○ ○	十四世紀半ば 一四〇五—二五 一四六五—七〇 一四五〇—一五〇〇	不明 不明 不明 不明	『生の傲り』* 『堅忍の城』 『人間』 『知恵』	アイランド ノーフォーク ノーフォーク ロンドン	五〇二 三五四 九一三 二六三	一二 三五 七	二七以上 五
○	一四九五 一五〇八	メドウオール 不明	『自然 二部作』 『現世と幼児』	ランベス宮殿 ロンドン周辺	二八五〇 九七四	二一 九	六 二
○	一五三—四 一五一四	不明 不明	『青年』 『嘲り屋ヒック』	リンカーン ロンドン周辺	七九五 一〇八	六 六	五 四
○	一四九五— 一五一九(訳) 一五二〇—二	訳者不明 スケルトン	『万人』 『寛仁』	不明 ロンドン	九二一 二五六八	二〇 一八	七一〇 五

(奇跡劇を含め聖人劇は除く。行数は版本により若干異なる。『堅忍の城』はラテン語引用行を除く。断片のみ伝わる劇は題名の右に*印を付けた。)

この表について少し説明しておこう。

(一) 作者

作者は一般に不明であるが、劇中の濃厚なローマカトリックの説教的要素や道德倫理と大衆

に分かりやすい擬人法とからして学問のある聖職者や、大学関係者（一五八〇年代の大学出の才子たちの祖先とも考えられる人たち）であろう。『生の傲り』（アイルランドではなくてセント説もある）から『人間』までは地方の人と考えられ、『堅忍の城』や『人間』は、リンカーンとケンブリッジとイーストアングリアを結ぶイングランド中東部在住のそれぞれ独自の想像力を持つ人たちの手になったようである。『知恵』（*Wisdom*）についてもイーストアングリアの人による作とされることもある。そして、サー・トマス・モアを育てたジョン・モートンの下で司祭を務め、英国最初の完全な屋内世俗劇『フルゲンスとルークレース』（*Fulgens and Lucrece*）に加え、生彩に富む道德劇『自然』を書いたメドウォール（一四六一—一五二二年？）の出現は、地方からロンドンへ演劇文化の中心が移っていくばかりでなく、不明作家からヒューマニストの劇に移行する象徴的な意味合いを持つと言えよう。スケルトン（一四六〇？—一五二九年）は桂冠詩人として有名だが、劇作に当たっては『人間』に類似した構造と寓意的な手法を堅持しつつ、王侯の没落と再生を劇化した。メドウォールにしろ、スケルトンにしろ、『自然』に負うところが多い『青年』の作家にしろ、一時的に墮落する人間に注ぐ諷刺のまなざしは鋭いが温かい。

(二) 題 名

『生の傲り』から『知恵』まで題名は後世に付けられたもので写本にはない。『万人』は詳し